将来の働き方・生き方を考えよう（特別活動）

所要時間　５０分～６０分　　**対象　中学生**

ねらい

○女性の労働をめぐる問題について考え、自分の進路を真剣に考える態度を育てる。

準備

・ワークシート
・ＤＶＤ「ワーク・ライフ・バランスをしっていますか？」（内閣府男女共同参画局）

進め方

	活動の流れ（指導者の教示、子どもの反応・行動）	留意点
導入	１　「自分の将来について考えてみよう。」 ・５年後、どうしていたいか？ ・１０年後、どうしていたいか？ ・１５年後、どうしていたいか？ ２　男女とも、１５年後に、結婚して、子どもができて、やりがいのある仕事もしているとして、今日の学習を進めることを確認する。	○どんな働き方や生き方をしていたいか具体的に考えさせる。
展開	３　「日本の女性の働き方について考えてみよう。」 ○年齢階級別労働力のグラフを見て、考え会う。 ・日本の女性の働き方のグラフが、「M字型曲線」を描いていることを知り、その理由について考える。 ・日本の女性が結婚して働ける条件が整っていないことや、出産・育児をしながら働くことへの理解がすすんでいないことを確認する。 ・グラフが台形に近づくためには、男性の参画が必要であることに気づかせる。 ４　ＤＶＤ「ワーク・ライフ・バランスをしっていますか？」視聴。（２７分間） ○ワーク・ライフ・バランスが実現された社会に近づくためにどのような取組が必要か考える。 ・仕事は、生活を支え、生き甲斐や喜びを与えるが、家事・育児・地域への貢献なども生活を充実させてくれることに気づかせる。	○「男女共同参画」の説明をする。 ○「ワーク・ライフ・バランス」の説明をする。 ○ＤＶＤの代わりに、資料「あなたイクメン？」「ながのイクメン手帳」を教材にする方法も考えられる。
振り返り	５　「今日の学習で、新たに分かったこと、感じたことをまとめましょう。」 ○男女の働き方、生き方のあるべき姿や、将来の自分の働き方・生き方に、今までより具体的なイメージを持つことができる。	

留意点等

○生徒の家庭状況や、家庭の在り方に対する考えが様々に存在することに配慮し、生徒それぞれの考えを否定せずに意見が出し合えるようにする。
○ＤＶＤ「ワーク･ライフ・バランスを知っていますか？」（内閣府男女共同参画局）は、長野県男女共同参画センターあいとぴあで貸し出している。
○「ながのイクメン手帳」（長野県作成）やそのコピーを読み合わせる学習も考えられる。

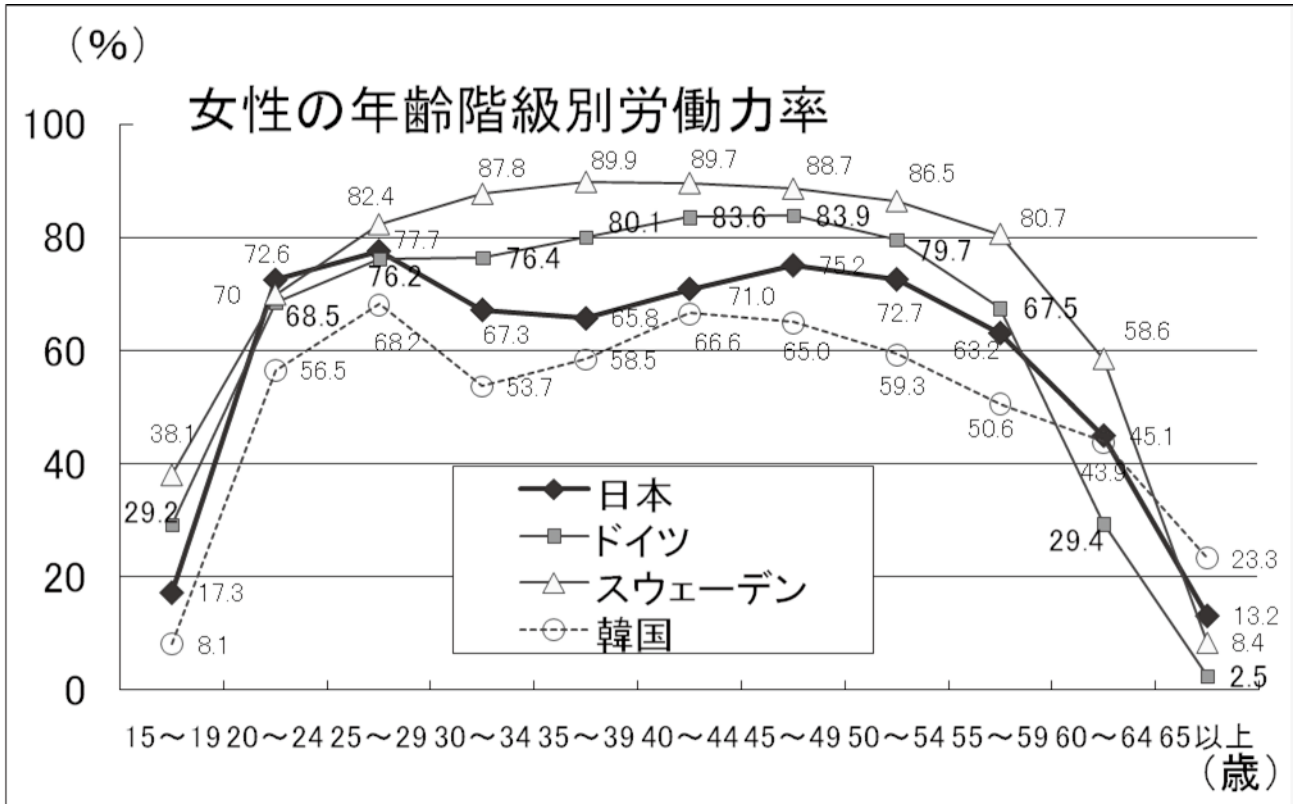
ワークシート１

年　　組　氏名

〇女性の年齢別階級別労働力率の国際比較のグラフです。

・折れ線グラフに色をぬると見やすくなります。

（日本…青　ドイツ…ピンク　スウェーデン…黄　韓国…水色）



（平成２２年度　内閣府「男女共同参画白書」）

○　このグラフを見て、気づいたことを書きましょう。

男女共同参画社会とは？

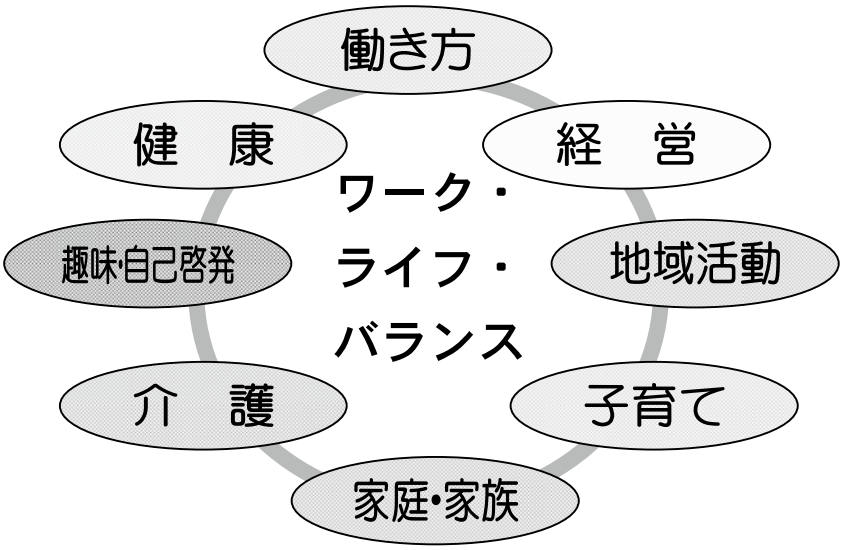
性別に関わりなく「自分らしく」生きるために、社会のあらゆる場面で、多様な選択の機会が確保でき、また男女が「共に」責任を担っていく社会です。

ワークシート２

年　　組　氏名

○ＤＶＤ「ワーク･ライフ・バランスを知っていますか？」の感想を書きましょう。

○ワーク･ライフ・バランスが実現された社会に近づくためには、どのような取組が必要だと思いますか。



ワーク・ライフ・バランスとは？

誰もが、仕事、家庭生活、地域活動、個人の自己啓発など、様々な活動を自分の希望するバランスで実現できる状態です。

【参考資料】

＜話し合ってみましょう＞

あなた　イクメン？

イケメンじゃない。イクメンだ。「めざせ、イクメン！」「イクメンはもてる！」　こうしたフレーズを耳にするようになった。育児（子育て）に積極的な男性を指す流行語である。

子どもと一緒に遊んだり、掃除、洗濯、料理したりする技能を身につけるためのイクメン講座や父親講座が盛況だという。非常に結構なことではないか。家庭に目を向けない父親が子どもや妻に大きな犠牲を強いているという指摘はまんざら間違いではないと私も思っている。

先月、中学一年生の息子の授業参観日があった。教室の後ろには「おかあさん」方が５～６人、「おとうさん」は私だけ。参観授業のあとは、体育館でＰＴＡ講演会。保護者は全部で２００人ぐらいいたと思うが男性は私を含めて２人だけ。もう１人の男性はＰＴＡ会長さんだったのだろうか。

「男女共生社会」とか、「育児にも参加できる働きやすい職場」とか「ワーク・ライフ・バランス」とかよく言われるが、世の中は一向に変わってこないとそのとき思った。なぜ授業参観日に男性はほとんどいないのだろう？

これをお読みの皆さんはどう思いますか？

（人権つうしん 第３８号（平成２２年２月２２日発行）より）

高齢者との豊かな交流活動（小学校中学年 総合的な学習の時間）

１　高齢者との交流活動の意義

急速な高齢化が進む社会で、家庭や地域の在り方が問われており、児童生徒の生活も無関係ではいられない。高齢者の人権に関わる問題としては、高齢者に対する身体的・精神的な虐待などや、社会参加の困難性などが指摘されており、社会全体の認識と理解を深めていくことが求められている。

学校においては、継続的に高齢者とかかわる学習活動を展開し、高齢者に対する尊敬や感謝の心を育てるとともに、高齢社会に対する基礎的理解や介護・福祉などの課題に関する理解を深め、高齢者と共に生きようとする態度を育てたい。

ここでは、小学校４年生が、学校の近くにある宅老施設（認知症対応デイサービス）の高齢者と年間を通して交流した事例を紹介する。

２　取組の内容

高齢者との交流学習のよさ

☆宅老施設を複数回訪問し、交流を積み重ねることで高齢者とのつながりを深めることができた。
☆交流活動の前に話し合い活動を行ったことで、交流の目的意識や相手意識を高めることができた。
☆ペアや小グループで高齢者とかかわることで、相手を尊重する気持ちや共に楽しむ交流活動にしたいという願いを膨らめながら活動することができた。
☆交流活動を振り返ることで、新たな発見や疑問が生まれるとともに、より相手を理解したいという気持ちを高めることができた。
☆高齢者や施設職員に喜ばれる経験や、友達の気付きや考え、行動のよさを認め合う活動により、自己肯定感や自己効力感を高めることができた。

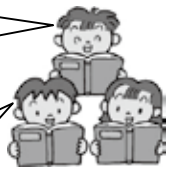
学習の流れ

「音読の発表をぜひ聞いてもらいたいな。」
～交流を更に進めたいと願っている子どもたち～

○昨年から続いていた宅老施設のお年寄りと今年も交流したいという願いを大切にしながら、交流内容を考えました。
○どんな音読発表会にしたいか自分の願いを発表したことで、交流に向けての意識が高まりました。
○音読の発表を聞いてもらうお年寄りの顔を思い浮かべて、何度も練習しました。

大きな声で、はっきりと読むようにしたい。

句読点に気をつけ、登場人物になりきって読みたい。



私たちの音読を喜んでもらえるように頑張りたいな。

「あれ？　どうして下を向いているのだろう。つまらないのかな。」
～音読発表会でのお年寄りの姿を振り返る子どもたち～

○お年寄りの様子を振り返りながら（ビデオ視聴）、満足感や感謝された喜びを発表しました。
○お年寄りが下を向いていたり笑ってくれなかったりした様子から、「本当に楽しんでくれたのか」という新たな疑問が出されました。
○お年寄りの気持ちを確かめるために、施設職員の方の話を聞いたり、「擬似高齢者体験」をしたりしました。

とてもうれしそうで私たちも楽しかったけど、本当に聞いてもらえたのか分からなくなった。【Ａさん】

（擬似体験）とっても重いなあ

・・・とても重くて動きづらかったです。おばあちゃんたちは、こんなに耳が遠いんだなあ、わたしも、おばあちゃんになったらこんなになるんだなあと思いました。音読は、もう少し大きい声で発表すればよかったなあと思います。大きい声で発表したつもりだったけど、おばあちゃんたちには聞こえなかったのかなあと思いました。【Ａさんの学習カード】

○「みんなで、お年寄りにもっと喜んでもらえる交流会を考えよう。」

「もっとお年寄り（の思いに）に近づきたい。他のお年寄りのことも知りたい。そのためにみんなが楽しめる交流会にしたい。」～相手意識や目的意識を高める子どもたち～

○少人数グループやペアで決めたお年寄りに自己紹介したり話を聞いたりする中で、もっと分かり合いたいという思いを強くしていきました。

Ｂさんから仕事のことや学生時代のこと、運動が得意なことなどを聞いたよ。昔はお手玉や羽根つきをよくやっていて、得意だったんだって。もっといろんなお年寄りのことを知りたいな。【Ａさん】

○「お年寄りもクラスの友だちも、みんなで楽しめる交流会にしたい。」と新たな願いをもちました。

○一人一人交流してきたお年寄りの紹介をしながら、一緒にやりたいことを話し合いました。

Ｂさんと羽根つきをやってみたいな。でも、これは全員ができるかなあ・・・【Ａさん】

Ｔ：お年寄りのことがいっぱい出たね。たくさんやりたいことも出してもらったけど、どうやって決めていこうかな。

C1：おばあちゃんがパワフルに動くんじゃなくて、座ってできるものがいい。羽根つきは、走れない人が無理して走ったりするとけがをする。そうすると、僕たちも困るから座ってできるものがいい。

（【Ａさん】「安心してできるものがいいよね。」とつぶやいた後、手を挙げた。）

C2：ボール遊びも座ってできるけど、ボールが落ちたり遠くに行ったりすると動かなきゃいけない。C1 さんが言ったように、立った座ったり体を動かさないでできるものがいい。お餅を食べるのも喉に引っかかるのが心配です。

C3：羽根つきは、足が不自由な人はできないよ・・。

C1：車椅子の人もいるし・・・。

（【Ａさん】「Ｂさんも動くことは無理かもね・・。」と、隣の友だちに語りかけた。）

みんなで楽しめる会にしたい

○お年寄りの体のことを気づかいながら、全員ができることを考えていきました。互いの思いを話し合うことで相手意識がより明確になり、友だちの考えを聞きながら自分の考えた活動を検討していきました。

みんなが、こんなにおばあちゃんたちのことを思っていることを初めて知りました。みんなの意見を参考にして、おばあちゃんたちの笑顔をたくさん見たいです。（Ａさんの学習カード）

友だちへの新たな見方を広げ、共に学ぶ仲間としての信頼感をもち、お年寄りの笑顔に出会うことに喜びを感じたＡさん

～つながりを広め、深める子どもたち～

交流活動を行う前の子どもたちは、学校近くにある宅老所を目にするものの、そこで生活しているお年寄りを意識することはなかった。そこで、普通に生活しているだけでは出会うことができない高齢者と子どもたちを出会わせ、語り合うことを繰り返しながら交流活動を広げていった。

子どもたちは、交流を継続する中で、高齢者の姿を見つめたりかかわったりして、自らの気付きや思いを語り合い、徐々につながりを深めていった。今まで自分があまり意識しなかった対象が、気になる、考えてみたい、かかわってみたい対象になり、無関心ではいられない存在になっていった。こうした無関心ではいられないかかわりが生まれたことが、互いの人権を尊重する態度につながっていったと考えられる。

◎身近な高齢化の問題、特に認知症の問題は、高齢者を、敬い、いたわる存在といった見方だけでなく、人間の尊厳という点から、感じ、考えていく問題である。認知症をはじめとする高齢者の人権に関わる学習は、家庭・地域の実態を踏まえながら、各学校で取り組むべき内容である。

高齢者との豊かな交流活動（小学校高学年 総合的な学習の時間）

１　単元名　「わたしたちにできること～デイサービスセンターのお年寄りとの交流から～」（６年生）

２　単元設定の理由

Ｉ市は高齢化が進み、人口の３０％が高齢者で占められている。クラスの子どもたちの家庭環境を見ると、祖父母と同居している子と離れて暮らしているという子がおよそ半数ずつになっている。子どもによっては、日頃高齢者と接する機会がほとんどなかったり、家に祖父母がいてもそれ以外の地域のお年寄りとは接する機会が少なかったりする子がほとんどである。そのため、子どもたちは、これまで地域で出会う高齢者が日頃感じている困難さや、生きがいについて知る機会は少ない。

６年生の子どもたちは、明るく元気な子が多い。しかし、多くの人とかかわる活動では自分のやりたいように行動してしまったり、反対に指示されるまではなかなか動けなかったりする姿がみられた。相手の立場や考えに思いを寄せ、自ら状況を考えて行動することが難しいように感じられる。

このような子どもたちに、デイサービスセンターの利用者と交流することを通して、高齢者のことをより深く知ったり、実際に高齢者とどう関わるのかを考えたりして、相手の立場を考え、自分から進んで行動できるようになってほしいと考えた。また、交流を通して高齢者たちが暮らしの中で感じている困難さやそれを克服して明るく生きているたくましさ、生きがいや高齢者の知恵に気づき、温かい気持ちで接することができるようになってほしいと願い、この単元を設定した。

３　人権教育とのかかわり

○高齢者の心情を共感的に受容し感じ取ることができる。（技能）
○高齢者の知恵や生き方に対する尊敬や感謝の心をもち、共に生きようとする。（価値・態度）
○高齢社会に対する基礎的理解や介護・福祉などの課題に関する理解を進める。（知識）

４　単元目標

○学級で定期的にデイサービスセンターを訪問し、高齢者とかかわる活動を通して、児童一人一人が高齢者を理解し、思いやりをもって自分なりのかかわり方を考えることができる。
○高齢者と交流したり、一緒に活動したりしながら、高齢者がもっている生きがいや知恵を教えてもらい、明るく生きているたくましさを実感し、お年寄りの大切さに気づくことができる。

５　単元の評価基準

評価の観点	①気づく力【Ａ学習方法】	②解決していく力【Ａ学習方法】	③共に生きていく力【Ｂ自分自身】	④表現する力【Ａ他者・社会】
評価基準	ア高齢者の知恵や生きていくたくましさに気づく。	ア相手に喜んでもらえるためにどうしたら	ア身近な高齢者に対して自分たちができることについて考える。	ア高齢者と楽しく会話する。 イ他学年に自分たちの活動の様子や活動から学んだことを発信する。

６　単元展開の大要

学習活動（時数）	・児童の姿と主な活動の流れ	○主な支援　□評価
１　デイサービスセンターへ行こう（１回目の訪問計画・実施・振り返り）（４）	（・地域探検にでかける。） ・デイサービスセンターってどんなところかな。 ・センターへ行って何をすればいいかな。 →リコーダーの発表をしよう。（練習） ・リコーダーの発表。 ・センターの方のリードでお年寄りと交流（簡単なコミュニケーション）	○センターの方と事前に活動の目的や児童の様子などについて打ち合わせをする。 ○利用者であるお年寄りの日頃の様子を伝え、安全面で注意することを事前に学習させる。 ②―ア

2　おじいさんおばあさんとなかよくなろうⅠ（２回目の訪問計画・実施・振り返り）（4）	・班ごとに交流内容を考えよう。 ・レクレーションは何をしよう。（１回目はレクに時間がかかってしまった。） ・２つの部屋に分かれたけれど、隣の部屋の様子はどうだったのかな。 ・お互いの部屋での様子はどうだったのかな。 ・たくさんお話ができるといいな。 ・レクの数は少なくしてお話ができるようにしよう。	○１回目の反省を参考にして２回目の活動を考えさせる。 ○お年寄りでも楽しめるレクレーションの資料を用意する。 ○より身近に接することができるよう、お年寄りも２つの部屋に別れて交流活動を行う。 ○お年寄りの様子や職員の方々の様子についても振り替えらせる。（学習カードを用意） ②―ア
3　認知症サポーター養成講座受講（1）	・認知症ってどんなものなのかな。 ・劇で見るとよくわかるね。 ・「おどろかない」「いそがせない」「だいじょうぶだよ」の３つが大切なんだ。	○市内の認知症サポーターの方々に指導していただく ②―ア
4　おじいさんおばあさんとなかよくなろうⅡ（３回目の訪問計画・実施・振り返り）（4）	・全体の進行計画立案とレクの準備。 ・職員の皆さんの接し方（話し方等）を参考にしよう。 ・前回と別の部屋をそれぞれ訪問。 ・いろいろお話を聞いてみよう。 ・うまく話ができなかったり、レクが楽しそうではなかったりした。	○お互いの部屋の様子について次回の参考になることを出し合わせる。 ○お年寄りと話ができる時間を多く確保できるよう助言する。 ①―ア　②―ア　④―ア
5　おじいさんおばあさんとなかよくなろうⅢ（４回目の訪問計画・実施・振り返り）（4）	・今度は、一人一人お年寄りと交流できるように準備しよう。 ・どのようにお年寄りに接すればいいのかセンターの方に教えてもらおう。 ・５回目の訪問計画を立てよう。	○班ごとの活動が中心だったが、今回は一対一で関われるようにしていく。 ○職員の方の考えや接し方を紹介できるように準備する。 ①―ア　②―ア　④―ア
6　おじいさんおばあさんとなかよくなろうⅣ（５回目の訪問計画・実施・振り返り）（3）	・だんだん楽しくなってきた。 ・お年寄りが喜んでくれることが自分にとってもうれしくなってきた。 ・お世話になった職員の方々にお礼の手紙を書こう。	○自分たちで前回の反省を元に５回目の訪問の計画を立てるよう指示する。 ①―ア　②―ア　④―ア
7　活動の様子をいろいろな人に知ってもらおう。	・これまでの活動をまとめて全校に発信する準備をしよう。 ・参観日などで保護者、地域の方々にも知ってもらおう。	○学習カードや展示物、写真や動画などを整理しながら活動を振り返らせ、伝えたいことをまとめられるようにする。 ③―ア　④―イ
8　卒業前にもう一度訪問しよう。（2）	・またおじいさんおばあさんの喜ぶ姿が見られるといいな。	○感謝の気持ちを伝えられる訪問にできるように助言する。 ③―ア　④―ア

６年生のみなさんへ

＜デイサービスセンター職員の方からのお手紙＞

先日は、デイサービスセンターに交流に来てくださり、ありがとうございました。

利用者さんの中には、いつもは見られないような笑顔を見せる方や、いつもは職員の問いかけに返事しかしないのに、自分から話しかけている方もいらっしゃいました。わたしたちは、利用者さんが元気になってくださったり、笑ってくださる姿を見られることがとてもうれしいのです。みなさんが訪問してくださることは、高齢者の方にとっては、とても刺激になって、脳の活性化にも大きな効果があると思います。とてもありがたいことです。

私たち職員は、ご利用されている高齢者のみなさんの生きてこられた過程の途中しか関わっていませんが、人生の先輩だということを常に頭において尊敬の気持ちをもって仕事をさせていただいています。利用者さんには、介助されることが負担にならないように心がけ、利用者さんを否定するような言葉や行動はとらないようにしています。

ここには、認知症の方をお世話させていただく施設もあります。認知症は、脳の病気で、忘れてしまったり、思い出せなかったり、考えたりすることがうまくいきません。ですから、利用者さんが同じことを何回くりかえしお話されても、初めて聞いたように受け止めていいます。みなさんも、認知症のサポーターになったとお聞きしています。今は、介助されることは特別なことではなく、だれもが通る道ではないでしょうか。

みなさんが、これから交流を続ける時には、なるべく一人一人の方とお話する時間があると、とても喜ばれると思います。短い時間の記憶はなくても、昔の記憶はしっかり残っていらっしゃる方も多いので、昔の仕事やできごとなどを聞いていただくと、記憶がよみがえってくる方が多いのです。利用者さんは、大変な時代を生きてこられ、今のように便利な道具もない、食べ物も栄養価の低いものを食べ、一生懸命生活してこられた方がほとんどです。

わたしたちは、利用者さんのやる気を引き出したり、励ましたりしながら、楽しくおだやかに過ごしていただけるために仕事をさせていただいています。利用者さんが一度楽しかったと思っていただければ、次に利用する日がまた楽しみになってもらえるので、ホール内に笑いごえがひびきわたるようなデイサービスになるよう心がけています。

６年生のみなさん、これからも時間の許すかぎり、来ていただけると、とてもありがたく思います。よろしくお願いします。

外国籍児童と共に学び合う

～安心して生活できる場づくりと、母国に自信を持てる活動を取り入れて～

Point：他の教師、保護者と連携する中で学校としての支援体制を整え、外国籍児童の母国の文化を学ぶ機会を設けながら、偏見をなくしていく。

1　取組のねらい

本校では、近くの工場で外国人労働者を受け入れている関係から、タイやフィリピン、ブラジルなどからの転入生が増える傾向にある。中には、日本に来ることが初めてで、まったく日本語が分からない児童もいる。そのようなことから、本校では日本語指導教室が設けられ指導教員もついているが、学級の子どもたちとなかなか気持ちを開けずにいたり、学習意欲も高まらないといった状況も見られたりすることがある。また、外国の文化を知らないために、外国籍児童に対して偏見を持ったり、いじめの対象としたりすることも心配された。

そのような外国籍児童に対して、子どもたちとの関わりを増やし、自信を持って日本での生活ができるようにするために、外国籍児童から子どもたちが学ぶ機会をつくるようにした。

2　取組の内容

（1）　複数の教師で支援できる体制や家庭との連携

本校の日本語指導学級には、ポルトガル語を話せる教員に加え、新たに市の加配として支援教員が一人つくようになった。学級では担任が身振り手振りを交えながら伝えているが、他の子どもへの指導もあるため、手が回りきらない部分があるのが実情であった。転入して間もない頃には特に厚い支援が必要となってくるため、いろいろな立場の支援教員（学習習慣形成支援・自律補助支援）にも教室に入ってコミュニケーションの補助をしてもらったことも、大きな助けとなった。特に日本語指導教室では、普段教室では見せない姿を見せたり担任に伝えられない思いを日本語指導教員に話したりすることもある。現在は、日本語指導教員と連絡ノートを用いながら様子を伝えあっている。このような職員間の連携による子ども理解が重要になってくるだろう。

また、子どもには伝えたつもりでいて、学校からの連絡がなかなか保護者に届いていなかったり、内容が理解されていなかったりすることがままある。それは、外国籍児童にとってそれらの情報の内容や重要性が理解できていないためであったり、保護者自身も学校のお便りの意味が十分に理解できていないためであったりする。そのために、お便りの漢字にすべてふりがなを振って手渡している教師もいる。また、電話連絡のみならず、家庭訪問を繰り返しながら、学校での様子を伝えたり、逆に学校で困った事柄はないかといったことを聴いたりしながら連絡・連携をしっかりととっていくことが大切である。

（2）　外国人への偏見に対してアンテナを高くしていく

ある時、学級の男子が廊下に整列をさせようと呼びかけたところ、並ばずに遊んでいた外国籍児童（Ａさん）に文句をつぶやいた。そして、最後に「外国人のくせに」そんな言葉が口をついてしまった。外国から来てまだ日が浅いＡさんには、するべきことが全く理解できなかっただろうことを確認した。また、「外国人のくせに」という中に、相手をバカにした気持ちはなかったのか、生まれた国の違いで見下したように聞こえる言い方はよくないことなどを話した。また、その子の家庭にも状況を説明し、共に言葉の重さについて考えていただいた。

ともすると、外国人に対して偏見を持って接してしまう傾向は、子どもたちばかりでなく保護者の中にも存在することがある。そのような場面をアンテナ高く把握し、間違った考え方であることを諭していくことが必要である。そのためには、相手の国の文化や素晴らしさを理解させていくことが大切となる。

（3） 外国籍児童の母国の文化を学ぶ機会を設ける

日本語もタイ語も話せるＡさんのお母さんに学校に来ていただき、Ａさんの「知られざる姿」を話してもらったり、知っていると日常生活がスムーズにいくと思われるいくつかのタイ語を教えてもらったりする機会をつくった。もちろん、Ａさんもタイ語の先生として笑顔でみんなに教えてくれた。

- タイ語を教えてもらって、おはようとこんにちはが同じ言葉だったからびっくりした。最後に女の子が「カー」男の子が「クラップ」というのが不思議だった。
- Ａさんのお母さんは日本語も知っているし、タイ語も知っているしすごいなあと思った。
- Ａさんのいろいろなことがわかってよかった。どうして水泳がうまいかとか、タイでは男の人はみんなお坊さんになることとか、初めて知ることばかりだった。

タイ語と日本語訳は教室の壁に掲示され、いつでも目にしやすいようにした。「サワディー！（こんにちは）」「カープーン（ありがとう）」子どもたちは普段の生活の中でもＡさんに対して、また、友達同士でタイ語を使う姿も見られるようになった。

また、しばらくしてＡさんのお母さんをお招きしてのタイ教室第２弾「グリーンカレー作り」を行った。子どもたちは、まさに本場の味に舌鼓を打った。カレーづくりの合間には子どもたちから「タイと日本の違いは？」「日本に来て困ったことは？」「タイではどんな家に住んでいるの？」など質問がされていた。さらに、後日の親子レクレーションでは、保護者もグリーンカレーづくりをし、親子共々交流を深めていく機会へと発展していった。

廊下に掲示された「タイクイズ」

３　取組についての評価等

「タイにはそんな物があるんだね」「日本の味と違うけどおいしいな」「そこは日本と同じだね」…。学級の子どもたちがタイの文化に興味を示し､Ａさんは自分の国に対して誇りを持てるようになっていった。また、Ａ さんの得意な運動の場面を大事に位置づけ、友に認められていく場面をつくっていったことも、自信につながっていったと思われる。

そして、クラスの子どもたちも、言葉が通じないことで逆にＡさんは今何に困り、どんなことをして欲しいと感じているのかを察していく姿も見られるようになっていった。教師はそのような子どもたちの気持や態度を認めながら、分かり合おうとする心や姿勢が大切であることを確認していった。

（『集まってひとつの花 生徒指導・人権教育取組事例集～いじめのない集団づくりのために～』（長野県教育委員会）より）

障害のある子どもを取り巻く学級集団づくり

1　障害のある子どもが安心して生活できる集団づくり

子どもたちは、学級の中で友だちとかかわり合いながら生活をしている。しかし、発達障害の子どもは、その障害の特性から友達とのかかわりがうまくいかなかったり、集団が苦手であったりする場合がある。しかし、その子どもを取り巻く学級集団が、一人一人の違いを認め合ったり、困っている友達を助け合ったりできる集団である場合は、障害のある子どもも安心して生活ができる。

したがって、障害のある子どもが、学級の中で居場所をつくり、安心して生活するためには、障害のある子どもの対人関係の力を高めるとともに、受け入れる子どもたちの対人関係の力や人権意識を高めることが大切である。

友だち同士の適切なかかわり方を学ぶにはソーシャルスキルトレーニングが有効である。たとえば、人づきあいのスキルとしてのソーシャルスキル（「ありがとう」「ごめんね」「いいよ」など）を学ぶことによって人間関係を円滑にすることができる。

2　学級集団がより居場所のある集団となるためのゲーム

（1）学級集団の状態を知るためのアセスメント（見立て）

学級の状態を知るためのアセスメントとして、Ｑ－Ｕを利用した。

（2）友だちとうまくかかわり、集団が集団として醸成していくための学級集団づくりプログラム

学級集団で次頁の表の対人関係ゲームプログラムを行った。

＜実施していく上での注意＞
・運動量の多いものから始める。
・楽しいゲーム性のあるものから始める。
・かかわりの質と量を段階的に高める。
・段階的にソーシャルスキルを取り入れていく。

コラム　対人関係ゲームプログラム

身体運動反応と楽しいという情動反応を活用し、不安や緊張を起こりにくくするゲーム。対人関係の動機付けを高め、対人行動の自己効力感を高めることによって、人間関係づくりと学級集団づくりに効果をあげている。

＜対人関係ゲームの種類＞
① 係をつけるゲーム　② 人と協力するゲーム　③ 役割分担し連携するゲーム
④ 心を通わすゲーム　⑤ 折り合いをつけるゲーム

Ｑ－Ｕ

「たのしい学校生活を送るためのアンケート（1998）」学校生活意欲尺度、学級満足度尺度からなる。学級満足度尺度は、児童のいじめや学級不適応の可能性を発見できる尺度として作成された。

時	ゲーム	ねらい・友だちとの関係	獲得したいスキル
1	①じゃんけん　②クッキーゲーム ③じゃんけんボーリング ④カモーン（カムオン）	楽しい経験、友だちを誘う ・誘われる	お願いします みんなおいで はいよ
2	①じゃんけん　②クッキーゲーム ⑤凍り鬼　⑥一緒に遊ぼう	友だちを助ける・助けられる	ありがとう 一緒に遊ぼう いいよ
3	①じゃんけん　②クッキーゲーム ⑦くわがたゲーム　⑧共同絵画	友だちと楽しさを共有する、 自己主張（アサーション）する	入れて いいよ
4	①じゃんけん　②クッキーゲーム ⑨ありがとうシャワー	集団の中での居心地のよさを 感じる	ほめる 認める ありがとう

ア　共通ゲーム「①じゃんけんゲーム」「②クッキーゲーム」

学級の友だちとたくさんかかわることを目的としている。「じゃんけんゲーム」では、「できるだけたくさんの人とじゃんけんをしてください」という教示により、かかわりが増えることが期待される。「クッキーゲーム」では、自分のペアがなかなか見つからないことにより、たくさんの友だちとかかわることができる。合った友だちと、仲良く座って食べることにより、親近感と楽しさを感じることが期待される。

イ　「③じゃんけんボーリング」「④カモーン」

ゲームの中で楽しい経験をして、友だちを誘ったり、友だちから誘われたりすることの良さを感じることを目的とする。獲得したいスキルとして、「お願いします」「みんな、おいで」「はいよ」をゲームの中で使用する。ゲームの中で、身体を動かしながら友だちとのかかわりがもてることにより、他者と関わる際の不安が減少していく。

ウ　「⑤凍り鬼」「⑥一緒に遊ぼう」

友だちを助けたり、友だちから助けられたりすることや友だちを仲間に誘ったり、友だちから誘われたりすることの心地よさを感じることを目的とする。獲得したいスキルとして、「近づいて、目を見て、にっこり笑って」「ありがとう」「一緒に遊ぼう」「いいよ」をゲームの中で使用する。友だちとのかかわりが増えることや協力しあうことにより、対人関係場面における自己肯定感をもつことができる。

エ　「⑦クワガタゲーム」「⑧共同絵画」

友だちと楽しさを共有したり、気持ちよく自己主張することで折り合いをつけることを経験したりすることを目的とする。獲得したいスキルとして、「入れて」「いいよ」をゲームの中で使用する。友だちとのかかわりが増え、友だちとかかわるスキルを体験することができる。

オ　「⑨ありがとうシャワー」

友だちから、あたたかい言葉をもらうことにより、学級の中で居心地の良さを感じることができる。獲得したいスキルとして、「大好きだよ」「ほめる」「みとめる」「ありがとう」をゲームの中で使用する。友だちからの肯定的メッセージをもらうことにより、自己他者受容をする中で、学級での居心地の良さを感じることができる。

３　実践事例

（１）本時の学習指導案（４時間扱い中の第１時）

1　題材名　「クラスの友だちと、もっと仲良くなろう」（学級活動）

2　本時の主眼　クラスの友だちと仲良くなりたいと思っている子どもたちが、ソーシャスルキルを使ったゲームを学級全体で行うことによって、より友だちと楽しくかかわることができるようになる。

3　留意点　ゲームに入れない児童がいたら、相手を探している児童を誘うなどの声をかける。

4　本時案　　◇人権教育に関わる留意点

	学習活動	予想される児童の反応（○）及び評価（☆）	教師の指導	T	備考
導入	1　ゲームのねらいを確認する。	○もっと仲良くなるためのゲームだと確認する。	・みんなが、友だちともっと仲良くなるためのゲームをこれから一緒にしましょう。	1	
展開	2　ゲームをする。 じゃんけんゲームをする。	○たくさんの人とじゃんけんをするだろう。	○じゃんけんゲーム ・じゃんけんゲームをします。できるだけ、たくさんの人とじゃんけんをして勝ってください。 ・ルールを紙に書いて貼る。 同じ人と続けてじゃんけんをしないでください。ただし、同じ人とは２回までじゃんけんをしてもいいです。時間は２分です。	4	鉛筆 カード ボード ・楽しい雰囲気になるようにする。
	クッキーゲームをする。	○クッキーがあって食べられることにうれしさを感じるだろう。	○クッキーゲーム ・次に、クッキーゲームをやります。 先生が、クッキーを割りますので、クッキーを合わせて、合ったペアから、座って仲良くクッキーを食べてください。食べている時は、好きな食べ物の話をしていてくださいね。	5	クッキー
	じゃんけんボーリングをする。	○夢中になってゲームをする。	○じゃんけんボーリング ・チームを２つに分けて、先攻と後攻をきめます。守りは、ボーリングのピンになります。ボーリングのピンの配置とは逆に並びます。笛の合図で、一斉に走りじゃんけんをして、最後のキャプテンまで、勝ち抜いたら１点ゲットで、玉をバケツにいれます。負けたら、すぐ陣地まで帰って、またじゃんけんをしにいきます。 なるべく違う人とじゃんけんをして、たくさん勝ちましょう。	15	玉 バケツ ◇ゲームに入りづらい子には、声をかけるなどの配慮をする。
	カモーンをする。	・楽しんでやる。	○カモーン ・次にカモーンというゲームをします。 みんなで協力するゲームです。グループを決め、グループの中で１人キャプテンを決めてください。	15	◇早く終わったチームばかりではなく、時間がかかったチームの楽

		○勝ちが続くと喜ぶが、負け続けると機嫌が悪くなる姿もあるだろう。 ☆友だちと楽しんでゲームをすることができたか。スキルを使うことができたか。	キャプテンのところまで走っていき、じゃんけんをします。勝ったら、キャプテンの後ろを回って、次の人と代わってください。負けたら、「みんなー、おいでー」と大きな声で呼び、グループの人は「いいよー」と大きな声で返事をして、つながってきてください。勝てるまで、続きます。 ・勝ち負けにこだわらないように、ほめの声がけをする。		しさ・充実感に焦点を当てる。
まとめ	3　振り返りをする。	○振り返りカードを記入する。	・ゲームをやってみて、どんなことを感じましたか ・発表させる。	5	

（２）授業の様子（全４回）

「ジャンケンゲーム」では、夢中になってじゃんけんをして、とにかく勝ちたい、たくさんの人とじゃんけんをして１番になりたいという思いが強い子もいたが、友だちと楽しくかかわる中で、授業の終末では「また、みんなとやりたい」という発言が聞かれた。

「凍り鬼」では、助けてくれた友だちに、「助けてくれて、ありがとう」とカードに書いて、笑顔で手渡す子どもがいた。クラスの友だちは、「○○ちゃんて、意外と面白いね。」「楽しいことを考えていて、すごいな。」という感想を持つようになってきた。また、ゲームで使ったスキル「一緒にあそぼう」「いいよ」は、休み時間に、友だちを誘うときに使われるようになり、発達障害のある子どもも友だちとかかわることができるようになった。

（３）成果と課題

Ｑ－Ｕでは、ゲーム実施前に、不満足群にいた子が、友だちとかかわってくる中で、満足群に位置するようになってきた。ポジティブなかかわりが増えることやゲームの中で経験した「楽しい思い」「助け合い」「誘い合い」「あたたかい言葉や行為」が「友だちからの受容感」「学級の雰囲気が変わる」ことにつながった。

また、日常生活の対人関係にいい影響を与えた。今まで、気づかなかった友だちの良さや面白さが学級の中で認められ、受け入れる学級全体が、温かく親和的になった。また、友だち同士のかかわり行動が増えてきた。

学級の中で居場所があることは、自分が自分を好きになり、友だちを好きになり、そして、クラスが好きになる関係がつくられ、学級での居心地の良さが出てくることにつながる。

日常生活の中で友だちとのかかわりが増えていくためには、継続した指導が大切であり、教師が場面を捉えて指導をしていくことが重要である。

（『特別支援教育　教育課程　学習指導手引書（小学校・中学校編）』（長野県教育委員会）より）

＜参考文献＞

・「楽しい学級生活を送るためのアンケート「Ｑ－Ｕ」実施・解釈ハンドブック（小学生編）河村茂雄（図書文化社）（1998）
・「特別支援教育コーディネーターのための対人関係ゲーム活用マニュアル」田上不二夫他編著（東洋館出版）（2007）

自他のちがいを受け入れ、自分の心の変化に気づく交流活動
～　スペシャルオリンピックス（ＳＯ）との連携を通して　～

Point：自分とのちがいを受け入れにくい生徒が交流活動を行う中で、自己の変容を実感できる自己評価を通して、他者理解を深める。

１　ねらい

本校は、数年来人権教育カリキュラムの流れを踏襲し、年２回の人権教育月間においても資料集を利用しての知識伝達型の学習が多かった。そこで、交流活動との連携や統合を図り、学年独自で継続性のある題材展開を試みた（図１）。スペシャルオリンピックス（ＳＯ）の支援を受け、フロアホッケーを体験活動のための学習材として位置づけた。

２　内容

（1）学年題材・カリキュラムの開発

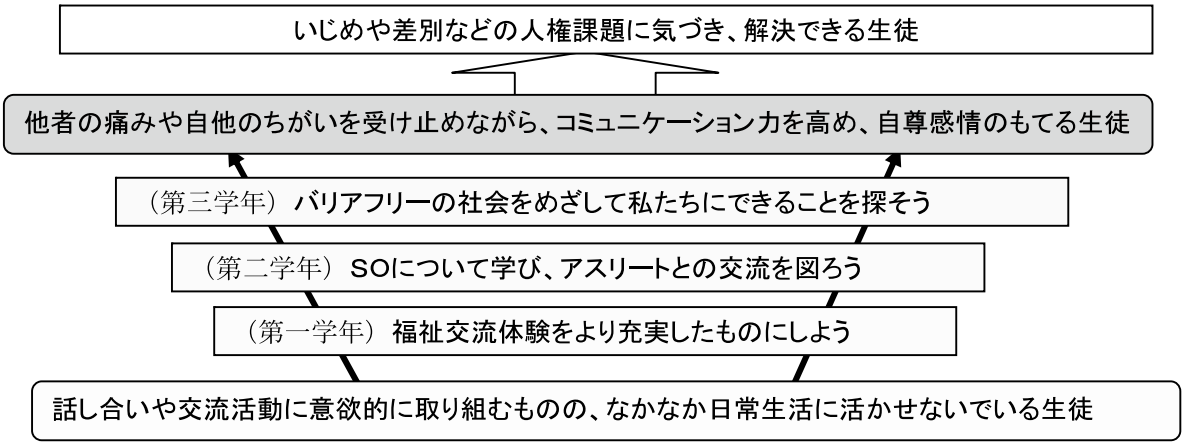


図1　学年題材を通したカリキュラムの発展性

お互いに楽しめる交流活動にするための留意点
- 相手がしたいことをするだけでは、互いに楽しめないことを共通認識する。
- 自分の感情や思いを表現しても、相手が受け入れてくれることを意識させる。

（2）SOとの出会い・連携

本校では、ＮＰＯ法人スペシャルオリンピックス日本名誉会長 細川佳代子先生との出会い、フロアホッケー体験をするなど、スペシャルオリンピックス（以下ＳＯ）を知る機会を得た。そして、スペシャルオリンピックス日本・長野・松本プログラム代表の中村嘉也さんにコーディネーターになっていただき、ＳＯについての講話やボランティア体験、アスリートや家族の講演をおこなった。生徒はＳＯの学習を契機として知的障害についての理解を深め、交流への意欲を高めつつある。

中村さんの言っていたように、まず声をかけたいです。今までSOとか障害のある人は、自分とは違う世界みたいに思っていました。できることなら、すぐにボランティアをしたい気分です。私たちの今できることを見つけて行動したいです。「自ら考え、行動する」を忘れないでいたいです。

(3)知的障害者授産施設の方々との交流

≪活動の概要≫

- パートナーを組んで、フロアホッケーや太鼓の演奏を通しての交流。
- 施設訪問をして、仕事の見学。

(4)交流活動の振り返り

交流活動の中で、パートナーに対する自分の気持ちがどのように、変化していったのか振り返りを行った。「交流会の最初の自分」と「交流会の終わりの自分」を付箋に記入し、模造紙に貼りだすことによって、自分の変化を明らかにさせた。

「どうしていいのか分からなくて不安で、なかなか声がかけられなかった。」→「笑顔で返事をしてくれてうれしかった。」、「今まで、障害のある人を避けていたような気がした。」→「気軽にハイタッチをしたりしてくれて、うれしかった。障害があるなんて関係ないと思った。」などの言葉が付箋に記入された。パートナーの明るい姿にふれ、自主的に活動できるようになった自分や仲間の姿を確認することができた。

(5)交流会を重ねる中での心の変化

最初は、本当に不安でどうしようかと思ったけど、あいさつをしたら、ちょっとだけそれがポーンと飛んでいきました。思いきって「ピンク好きなんですか？」と聞いたら笑顔で「はい」と答えてくれました。うれしかったです。今回の交流で自分が変われたらいいなあと思いました。 ＜第1回交流＞

前はパートナーの人がぜんぜん笑ってくれなくて不安だったけど、今回は自分から積極的に話したら笑顔になってくれた。 ＜第3回交流＞

パートナーは楽しんでくれたけれど、気を遣いすぎて自分が楽しめなかった。今度は、こっちから心を開いて交流を楽しみたいと思った。 ＜第4回交流＞

今回はパートナーの名前を呼んで、遠慮せずにできて楽しかった。
気を遣わないで普通に接して、とにかく笑顔でいたらすごく楽しかった。 ＜第5回交流＞

3 評価等

○子どもたちは、アスリートとの交流活動を重ねていく中で、自他のかけがえのなさを実感するとともに、「次回はこうしたい」という目標をもって交流できるようになり、活動を振り返る中で自分や級友の成長を認め、自尊感情の高揚へつながっていった。

○自分の感情や思いを表現しても、パートナーが快く受け入れてくれ、子どもたちもパートナーもお互いに充足感を得ることができた。こうした交流活動によって、他者理解が深まり、大勢の生徒が「今後いじめをしない自信がある」と、はっきり意思表示をすることができた。

(『集まってひとつの花 生徒指導・人権教育取組事例集～いじめのない集団づくりのために～』(長野県教育委員会) より)